

日韓語の動詞結合に関する対照研究

学位論文内容の要旨

本論文は、日本語と韓国語における動詞結合を言語学的な観点から比較対照したものである。ここでいう「動詞結合」とは、動詞と動詞が結合したものを広く指すが、「舞い散る」等の複合動詞以外に、「変わっていく」のように助詞類を間に介在させたものも含んでいる。前者のようなタイプは、これまで複合動詞として多くの先行研究があるが、後者のようなタイプは複合動詞の研究からは同じ枠組みで検討されることが少なく、枠組みを広く設定して網羅的に論じた研究とすることができる。論文本文は、多くの例文を含み、221 頁 (400 字詰原稿用紙換算 414 枚) に及ぶが、さらにそれに「第Ⅱ部 巻末資料編」として、『日韓複合動詞辞典』と『逆引き日韓複合動詞辞典』が付されており、これらは二段組み 183 頁 (400 字詰原稿用紙換算 933 枚) に及ぶ浩瀚なものになっている。

本論文では、動詞結合について、伝統的な言語学の方法論に基づき、音韻レベル・形態レベル・統語レベルに分けて、日本語と韓国語それぞれの精密な記述をまず行い、分析を加えた上で、対照を行っている。対照言語学的な分析に基づいて両言語における動詞結合の差異と共通性を明確にし、それぞれの動詞結合がどのようになされるかを理論モデルとして提案している。

本論文は、7 章で構成され、予備的議論を経て、第 2 章では形態構造のレベル、第 3 章では音韻のレベル、第 4 章では統語レベル、とそれぞれのレベルに分けて日本語と韓国語の動詞結合について詳細な記述と対照的分析を行い、第 5 章で両言語の動詞結合の形成を説明するモデルを提案し、第 6 章ではそのモデルの妥当性と実用性を実際の分析に適用して検証している。そして、結論と課題を第 7 章でまとめて論考を終えている。以下、章ごとに簡潔に趣旨を述べる。

第 1 章では、「動詞結合」の定義を明確化し、どのようなものを動詞結合に含むのかについて具体的に示した上で、対照分析に先立って予備的に確認しておくべきことを簡略にまとめている。第 2 章では、動詞結合の形態構造を論じる。日本語については、接続助詞-te が介在するものを、韓国語は -a/-eo/-yeo, -go, -ada/-eoda が介在するものを「関与する要素あり」とし、「関与する要素なし」のタイプと区分する。次に、日本語と韓国語で、それぞれの動詞の語幹を「活用変化しない部分」「基本形から-da を除外した部分」とし、子音語幹動詞と母音語幹動詞を同じ基準で扱うための枠組みを提示している。

第 3 章では、日本語と韓国語の動詞結合をそれぞれ音韻レベルで分析記述している。日本語では、-te の後接タイプを音便も含めて記述し、介在要素のないタイプについても母音

添加・母音脱落・子音交替などのプロセスを想定することで分類し、記述している。韓国語も語幹末の音と介在要素の組み合わせを一通り挙げて記述し、介在要素がないタイプも子音脱落と子音交替のプロセスを想定することで分類・記述している。両言語の対照では、どの位置でどのような音韻現象が生じるかによって対応関係を示している。

第4章では、名詞句に対する格支配能力の保持という観点から、動詞結合のタイプを VV / Vv / vV / vv (V は保持, v は喪失) と分け、さらに介在要素 (本論では「関与する要素」と呼ぶ) の有無で分けて、すべての組み合わせについて記述している。このことにより、日本語では介在要素のない複合動詞が大半であるのに対して、韓国語では介在要素を伴う複合動詞が大半であること、「上り下りる」「開け閉める」など対義語を素材とする複合動詞が日本語では不適格であるのに対して、韓国語ではこの種の複合動詞が適格になることがあることなどを指摘している。

第5章では、両言語に共通して適用可能な動詞結合形成モデルを提案している。このモデルでは、素材入力段階としての第Ⅰ段階、前項と後項が決まり、子音語幹に母音を付加するなど音韻処理がなされる第Ⅱ段階、形態的完成段階とされ、複合動詞としてのライセンスが行われる第Ⅲ段階、前段で明確に区分がなされなかった動詞結合についてフィルタリングを行い、意味的統合の処理も行う第Ⅳ段階、前段までで複合動詞とライセンスされなかった動詞結合について意味的統合と意味変化によって複合動詞としてライセンスする第Ⅴ段階、という5つの段階が設定され、個別に説明されている。

第6章は、前章で提案した動詞結合形成モデルの応用と称して、実際の分析に適用可能であることを示している。本章では、後項動詞に、日本語は「食べる」、韓国語は「먹다(meogda)」(「食べる」の意)をとる複合動詞について分析して、日本語の子音語幹動詞が/i/という母音を付加すること、両言語の介在要素の違い、両言語における複合動詞の形態タイプの偏りの差異、形態的緊密性の相違などについて確認している。第7章は、前章までを振り返り、全体の論点をまとめたのち、今後の課題として、複合動詞を含む4つのタイプに分ける妥当性とその区分基準についていまだ検討すべき点が残っていること、形成モデルの精緻化と再検討の二点を示し、論を閉じている。

本論文のポイントとしては、複合動詞の分析に前項動詞の「語幹」を基準として適用したこと、それによって日本語の動詞は語幹の自立度が高いのに対して、韓国語の動詞は語幹の自立度が低いと分析していること、介在要素の有無で網羅的に動詞結合を分析記述したこと、韓国語では対義語複合が {-고(go)} によって可能になるのに対し日本語では介在要素が対義語複合に関与しないことを明らかにしたこと、複合動詞のタイプとして日本語では介在要素なしが大半であるのに対して韓国語では介在要素を伴うものが大半で構成の分布が対照的であることを明らかにしたこと、日本語の子音語幹動詞がモーラ構造保持の観点から/i/の付加を行うとして、形態論的な分析を統一的に適用していること、などが挙げられる。

(以上)

学位論文審査の要旨

主査	准教授	加藤重広
副査	教授	津曲敏郎
副査	准教授	李連珠
副査	名誉教授	門脇誠一

学位論文題名

日韓語の動詞結合に関する対照研究

日本語と韓国語の対照言語学的研究は、さまざまなテーマでなされている。また、複合動詞を扱った研究も意味に関する研究を中心に多くの成果が見られる。しかし、日本語と韓国語の複合動詞を、広く関連するものも含めて、網羅的かつ統合的に分析しようとした研究はほとんど他に例を見ない。また、本論文が大部の『日韓複合動詞辞典』を作成しながらの分析であることは、地道な記述と考察に基づく研究であることを物語っている。複合語辞典は巻末資料とされているが、通常的小型辞書に匹敵する規模と完成度であり、独力で編集と項目記述を含む全作業を遂行したことは高く評価できる。これは、データの確実な記述と蓄積を前提要件とする、科学的な言語研究においては、基本的な研究方法と態度であり、方法論的に見て模範的な手順をとっていると言ってよい。

本論文が、音韻・形態・統語の各レベルに分けて分析を行い、それによって、日本語と韓国語の基本的特質をも明らかにしていることは重要である。特に、従来の複合動詞研究の枠組みを拡張して、両言語の複合動詞に構成タイプの分布における差異が見られること、複合における形態的緊密性に違いが見られることなどを指摘したことは、重要な成果と認めることができる。

また、動詞結合形成モデルは、実際の分析の途上で着想したものであり、高い説明力のあるモデルとするには今しばらくの彫琢を要するものの、両言語の差異を踏まえて共通のモデルを創出した点は、今後の対照研究にとっても重要な成果である。

以上述べたように、日本語と韓国語の動詞結合をテーマとした網羅的かつ統合的な対照研究として、本論文のような規模と一貫した方法論で記述・考察したものが他にないことを踏まえ、意義ある研究成果と認めることができる。

もちろん、本研究にも見直すべき軽微な誤解やわかりにくい用語法があるほか、連用形と語幹、また、語基という概念を再検討する必要性、格支配の認定方法、子音語幹動詞に付加される/l/についての位置づけがあまり明確でないこと、記述の枠組みに冗長さがあることなど、いくつかの問題点は見られるが、それらは本論文の成果の全体を考察したとき、

むしろ、これまでの研究を発展させるための手がかりともなりうるもので、相応の研究成果として認めることができる。また、総じて、明確な言語学的手順に従って網羅的な記述と分析を行い、日韓対照言語学の領域においても、複合動詞研究というテーマにおいても相応の成果をもたらしたことは明らかである。

審査委員会発足後、口頭試問を挟んで 5 度の審査委員会を開催して、子細に評価を議論し、本審査委員会は、委員全員の一致した見解として、博士（文学）の学位を授与するに相応しいとする審査報告書を文学研究科教授会に諮り、本学位申請論文については満票を以て学位授与が認められたものである。

(以上)